

補植のない造林地づくり (100%の活着率を達成して)

下呂営林署 福井昌三

上麻生担当区の新植は昭和46年度以前は、年平均36haであった。

昭和47年度以降は伐採箇所の関係で、七宗国有林のうちでも、隣の担当区の植付が主体となり、しばらくの間植付が少なくなっていた。

54年度からは、又、継続的に新植が実行できるようになった。過去の担当区の実績を調べてみると、昭和44～46年の3年間の補植率は、スギ22%、ヒノキ13%と悪い結果となっている。さらに昭和49年には、改植を2ha実行している。

造林事業の中で補植ほど無駄な作業はなく、署全体としての活着率向上対策として、秋植及び現地仮植の中止等の方法はとっているが、上麻生担当区では、こうした問題を取り上げ、皆で検討を重ね、現地の作業仕組の改善で、“補植のない造林地づくり”を目指し取組んだ。

1. 環境条件（七宗国有林一新植地）

- (1) 標高 270～690 m
- (2) 基岩 チャート
- (3) 雨量 夏期に多い
- (4) 特徴
 - ア ヒノキの生育に適している。
 - イ 基岩の露出及び石礫が多い。
 - ウ 南・西向きで乾燥度が高い。

2. 問題点

- (1) 補植率が高い。

昭和44～46年平均	スギ	22%
	ヒノキ	13%
- (2) 改植があった。

昭和49年	2ha改植
-------	-------
- (3) 生産性が低かった。

下呂署平均功程	238 本	(過去3年間の実績)
担当区平均功程	222 本	

3. 原因

(1) 環境に対する理解と対応の不十分

掘っても石礫ばかりで土のない箇所(ガラ場という)や、よく乾燥する場所の枯損が多いが、これらの理解と対応の不十分。

(2) 慣行による作業で、協調性に欠け、生産性も悪かった。

慣行による作業とは、従来の方法で、問題意識をもたず、ただ惰性的にやっていたことである。

(3) 苗木の取扱い不十分

苗木は生きものであることは知っていても、今一つ取扱いが粗雑になっていた。細部についての思いやりがなかった。

4. 目標

(1) 補植率2%以下(署目標と同じ)

(2) 生産性の向上 一人一日 225 本

5. 対策

(1) 活着率向上対策

ア 完全な客土

ガラ場でも、活着すればかえって良い成長を示すための植付が必要で、従来から竹箕などにより客土を実行していたが、この客土は、時には10m以上離れた所から、土を運ぶこともあり、大変な重労働で、とかく入土が少なく、なりがちであったのを、完全な客土を実行した。

イ 慣行による作業仕組の廃止

例えば、従来の植付作業をみると、条件の良し悪しに関係なく、作業着手の時、各人の持つて出る苗木の本数が同一のため、場所がよい人はペース配分をして植え、場所の悪い人は、急って早く本数を減らすことを考え、時には「まあよかろう」という植え方や、自分の本数さえ植えればよいという慣行になっていた。

こうした方法を廃止して、現地を十分検討し、安全作業で、目的と目標が各人がはっきりと自覚して、本数に拘わることなく、自分の植えた苗木に対して責任を持って実行した。

ウ 協分体制の充実

ガラ場の客土等の重労働は、2人1組の協力でいき、終業時限で苗木が余れば、手分けして植える等の協分体制で実施した。

エ ていねいな苗木の取扱い。

- A 苗木は着荷順の早いものから先に植える。
- B ガムテープを常時携帯し、ポリ袋の穴を見つけ次第塞いだ。
- C ポリ袋には完全な日除けを実施した。
- D 苗木を苗木袋に入れる時は、少しでも乾燥を防ぐため、袋のまま入れる。

これら苗木に対する細心の注意と愛情をこめて実行した。

(2) 生産性向上対策

ア “もう三本運動の展開”

木は2本では林である。3本植えることで森という発想から名付けた。これは、「1日の植付予定本数に、更に3本、上乘せするというのではなく、苗木の生態を考え少しでも早く植え、又、生産性からみて、時間内に苗木不足になれば、苗木運搬を行って、1日1本でも多く植えることによって、皆の力の結集が多大な成果につながる運動」として展開した。

イ 班目標の設定

毎日の目標を作り（個人の目標でなく）班全体の協力目標として実施した。

ウ 主任、補助員、出張者の植付参加

署長はじめ署の出張者も植付に参加した。

主任などは他に用務の多い中で、延10日以上も植付作業に従事した。

こうしたことが、生産性の向上ばかりでなく、現場と内務の一体感、協調性が生れた。

6. 結 果

(1) 活 着 率 99.8% (補植0)

(春植 6.35 ha、 28,500 本)

(2) 生産性の向上

1人1日 289本

活着率、生産性ともに、大きく目標を上廻ることができた。

7. ま と め

これからの造林は、

- (1) 慣習による作業の見直し
- (2) 作業目的と作業条件の理解
- (3) 署と現場および作業班内部の協調

により改善点を見出し、全員一丸となって取り組む姿勢こそ大切である。

また、ここでは植付の成果について述べたが、このことは植付のみならず、他の作業においても、

目的意識をもってあたれば、必ず良い結果が得られるという自信になって波及している現状である。